

しかめっ面をした顔、顔、顔。

緊張して僕は膝の上に置いている手をぎゅっと握りしめた。

「簡単な質問だ」

と中央のメガネが言った。

「君は……を殺したことがあるかい？」

緊張しすぎて、質問の一部分を聞き損ねた。だけど聞き返したら間抜け決定、即座に落とされてしまうだろう。僕はどうしたってこの仕事がほしかった。

ええい、直感で答えるしかない。

「あります。例えば蟻。小さい時、足で踏んづけたり、水を流したりしてたくさん殺しました。蟻に対して僕は全知全能の神であるかのように感じ、興奮しました」

……反応が鈍い。答えを間違ったのかもしれない。

慌てて、僕は付け足した。

「子持ちのやつを殺したこともあります。メスのお腹の大きいカマキリでした。腹の中

がどうなっているのか知りたくて、カッターナイフで切り裂いたら、小さな奴らがうじやうじや出てきて……」

だめだ、ますます反応が悪くなった。

「あ、もっと大きいのも。近所で子供に噛み付く野良犬がいたんで、火をつけていきながら焼き殺しました。いやあ、あの時の炎の美しさときたら」
しまった、我を忘れてうっとりしてしまった。

面接官たちが顔を突き合わせ、小声で何か話し合っている。

まずい、まずいぞ。ここで落とされたら、また無職が続く。

僕は大きな声を出した。

「それに、吸血鬼を倒したこともあるんです。ほら、太陽の光で……その、あの……」

おかえりください、と丁寧に追い出された。

どうも面接というのは苦手だ。

実技があるのはたいがい面接の後で、だからどうしたって僕のこだわり抜いた、芸術的な腕前を披露するまでには至らない。

なんて理不尽な世の中なんだ。

僕は腹立ち紛れに、駅のゴミ箱を蹴った。

狩人を募集していた。僕ほど適任はないはずだ。それなのに。

今日はもう暴れるしかない。ウサ晴らしに何匹か狩るとしよう。

夢の中で人を殺して回る爪の長いあいつ。フレディだっけ。

あいつをバラバラに引き裂いてやろう。

先月はジグ・ソウとかいう親父を罠に仕掛けて苦悶の末に死ぬように仕向けた。

僕ほど素晴らしい逸材を逃すなんて、バカな会社だ。

悪人を殺す。

罪にはならないし、人には感謝される。ストレス発散にもなる。

なのに報酬を得られないだなんて。馬鹿げた世の中だ。

歩く僕の背後で、複数の黒服が動いた。

どうやら面接は、狩人を募集していたのではなく、獲物を探すためだったらしい。

僕はうってつけの獲物ってわけか。

さあ、来るがいい。

ジャックに怖いものなんてない。